

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380872

研究課題名(和文) 児童・青年期のモラル・アイデンティティの発達に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study on the Development of Moral Identity in Childhood and Adolescence

研究代表者

松尾 直博 (MATSUO, Naohiro)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：10302902

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、児童・青年期のモラル・アイデンティティを把握する手法を開発し、モラル・アイデンティティがどのように発達していくのか、さらにそれらの知見をどのように道德教育に活かすことを分析する手法、質問項目を評定する手法などを検討し、児童期から青年期のモラル・アイデンティティを重層的に把握する研究方法を開発した。そうした方法論を活用し、モラル・アイデンティティがどのように発達していくのかを把握することにより、発達段階に合った道德教育を考える上での基礎データを得ることが可能性が示された。

研究成果の概要(英文)：In this research, I developed a method to grasp the moral identity of children and adolescence, how they develop moral identity, and how we can apply these knowledge to moral education. Based on previous research conducted overseas, I will study methods to analyze free description and methods to evaluate question items and develop a research method to grasp the moral and identity of adolescents from childhood to adolescence. By utilizing such methodology and grasping how moral identity develops, it is expected that it will be possible to obtain basic data on thinking about moral education that matches the developmental stage.

研究分野：教育心理学

キーワード：道德性 モラル・アイデンティティ 児童期 青年期

1. 研究開始当初の背景

(1) モラル・アイデンティティとは

モラル・アイデンティティ(moral identity)とは、道徳的であることがどの程度、自分らしさの感覚において重要で、本質的であるか、自分の価値観と一体化しているかについての個人差などと定義される(Hardy & Carlo,2011)。「道徳的であること」と「私らしくあること」が自己認識として調和、統合された状態とも言えよう。モラル・アイデンティティが確立されている人にとって道徳的行為をすることは、社会的規範に沿っているだけでなく、「私らしくあるとすること」すなわち「自分らしさと一致することをしよう」という動機づけが機能することである。反対に、モラル・アイデンティティが確立されている人にとって、反社会的行為をすることは、社会的規範に違反するだけでなく、自分のアイデンティティに一致しないことを行う、すなわち「自分への裏切り」の行為となる。したがって、モラル・アイデンティティの確立は道徳的行為の強い予測子であると考えられ、そのことを実証する研究も行われつつある。

(2) モラル・アイデンティティ研究の意義

モラル・アイデンティティの研究は、これまでの道徳性心理学の限界を補うアプローチとして、海外において急速に注目されつつある。国内外において、ここ数十年の道徳性に関する心理学的研究は、コールバーグの認知発達理論に強い影響を受けている。そのパラダイムの基本理念は、ある行為が正しいか、悪いかが、そしてそれはなぜかについて判断する能力である「道徳的推論」を重視する考え方である。すなわち、ある行為の正しさを認知的に高度なレベルで推論できる者が、道徳性が高く、より適切な道徳的行為を実行できるという考え方を中心とした理論である。

しかし、このような道徳的な認知、判断力、推論を重視するアプローチには、限界が指摘されている。いくつかの研究が、道徳的推論は道徳的行為の重要な予測子ではあるが、弱い予測子でしかないことを明らかにしている。また、Colby & Damon(1992)は、社会的に価値ある行為を長年に渡って続けている「道徳的模範者」を対象とした研究を行った。その結果、高い道徳性を示す模範者達は、コールバーグの道徳的発達段階で決して高い段階にあるのではなく、必ずしも洗練された道徳的推論能力を有しているとは限らないことが明らかにされている。

このような研究から、道徳的推論の能力は道徳的行為の弱い予測子でしかないという指摘が多くなされるようになった。つまり、認知レベルでは複雑で、高度な道徳的推論(判断、情報処理)ができたとしても、その人物が実際の場面で道徳的行為ができるとは限らないということが指摘されるようになったのである。このことは、研究や理論面

では、「道徳的推論と道徳的行為の間にはギャップがある」「ギャップには何が存在するのか」という疑問を生むことになる。そして、教育実践においては、「道徳的推論能力以外に、何を育てればいいのか」という疑問を生むことになる。多くの研究者が、道徳的認知(道徳的判断)は道徳的行為を可能にする重要な要素ではあるが、それを越えたより包括的な理論的な枠組みが必要だと感じている。

このような「道徳的認知-道徳的行為」のギャップを埋める構成概念として注目されているのがモラル・アイデンティティである。モラル・アイデンティティについての実証的研究が本格的に始まったのは、2000年代に入ってからである。大変意義深い研究領域であり、道徳教育への応用可能性も期待できる。しかし、現時点ではモラル・アイデンティティの測定方法など、まだ十分に研究が行われているとは言えない。また、モラル・アイデンティティの発達については、特に思春期前後の発達がどのような経緯をたどるのかなどについて、ほとんど研究が行われていない。

2. 研究の目的

(1) 先行研究の収集と展望を行う。モラル・アイデンティティ研究は比較的新しい研究トピックスであり、特に国内ではほとんど研究が行われていない。そこで国外の研究を中心に、先行研究の収集と展望を行い理論的な整理、研究動向の把握を行う。

(2) インタビューや自由記述文の分析方法の開発を行う。モラル・アイデンティティに関する研究において、語りや自由記述などの質的データを分析する手法が多く用いられている。本研究では自由記述を分析する手法を開発するために、基礎資料を収集し、分析を試みる。

(3) 自己記述式の評定尺度の開発を行う。モラル・アイデンティティの測定において、自己記述式の評定尺度の開発は、特に量的な分析において有用であると思われる。日本で開発された尺度はないため、海外の研究を参考に、新たな尺度の開発を試みる。

(4) 発達的变化についての研究を行う。モラル・アイデンティティは、どのように発達していくのか、重要な時期である中学生について縦断的データを測定し、検討する。

(5) 実践への応用可能性の検討を行う。日本において、道徳の授業は「特別の教科 道徳」という形で教科化される。小学校では平成30年度より、中学校では平成31年度より全面実施される。モラル・アイデンティティという概念やそれに関する研究は日本の道徳教育のこれからにどのような貢献ができるのかについて、考察する。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の収集と展望に関して、モラル・アイデンティティ研究は比較的新しい研究トピックスであり、特に国内ではほとんど研究が行われていない。そこで国外の研究を中心に、先行研究の収集と展望を行い理論的な整理と研究動向の把握を行った。

(2) モラル・アイデンティティに関する研究において、インタビューから得られた語りや自由記述などの質的データを分析する手法が多く用いられている。本研究では自由記述を分析する手法を開発するために、次のような方法で基礎資料を収集し分析を試みた。

大学生を対象に自由記述に含まれる道徳的価値の符号化を検討するために、次のような方法で研究を行った。

対象：東京都内の大学の学生 161 名

質問紙と手続き：Frimer & Walker(2009)を参考に作成した 14 の質問から構成される。道徳性と自己について尋ねる質問項目から構成されており、自由記述で回答を求めた。

分析方法：Frimer, Walker & Dunlop(2009)の開発した VEiN (Values Embedded in Narrative) コーディングマニュアルを著者らに許可を得て日本語訳を行ったものを使用し、自由記述に含まれる道徳的価値について符号化し分析を行った。

中学生を対象に自由記述に含まれる道徳的価値の符号化を検討するために、次のような方法で研究を行った。

対象：東京都内の公立中学校 1~3 年生 485 名。

質問紙と手続き：年度の初めに、今年度の個人の目標を自由記述で書くように求めた。

分析方法：自由記述で記入された今年度の目標の文について、テキスト分析ソフトを用いて、高頻度で含まれる語を検討した。

(3) 理論的な先行研究、尺度作成等実証的な先行研究を基に、独自に項目を作成して尺度の信頼性、妥当性を確認する。日本で開発された尺度はないため、海外の研究を参考に、新たな尺度の開発を試みた。

対象：東京都内の公立中学校 1~3 年生 485 名。

質問紙と手続き：海外における先行研究を参考に、14 項目からなるモラル・アイデンティティ尺度を作成した。どの程度自分に当てはまるかを 5 件法で回答する形式である。

分析の方針：新たに作成したモラル・アイデンティティの尺度について、信頼性、妥当性の検討を行った。

(4) モラル・アイデンティティは、どのように発達していくのか、道徳的価値の重要性の認識、価値の実現に対しての自己評価について、重要な時期である中学生を対象に縦断的データを測定し、検討した。

対象：東京都内の公立中学校 1~3 年生 501 名。

質問紙と手続き：道徳の学習指導要領を参考に、12 の内容項目について、それぞれ 2 つの質問（その道徳的価値がどの程度大切か、その道徳的価値をどの程度自分が実現できているか）を行った。回答は 5 件法で求められた。対象となった中学校は著者と協同で体験活動と道徳の授業を関連させることにより、道徳性の育成が図れるかについての研究を行っていた。年度初と学校行事の後などに質問紙を実施し、その変化について検討した。

分析の方針：道徳的価値の得点について、時期や学年の差があるかを検討した。

(5) 実践への応用可能性の検討については、次のような方法で行った。日本において、道徳の授業は「特別の教科 道徳」という形で教科化される。小学校では平成 30 年度より、中学校では平成 31 年度より全面実施される。モラル・アイデンティティという概念やそれに関する研究は、日本の道徳教育のこれからにどのような貢献ができるのかについて考察した。

次期学習指導要領の総則、「特別の教科道徳」についての学習指導要領、学習指導要領解説、関連する報告書等と、モラル・アイデンティティに関する研究論文等を参考に、今後の日本の道徳教育における可能性について考察した。

4. 研究成果

(1) 主として海外の先行研究の文献研究と展望により、モラル・アイデンティティは、いくつかの観点から定義されており、道徳性とアイデンティティが統合・融合されたもの、道徳的であることが自己を定義する上で重要であったり、中心であったりすることなどが共通していると思われる。

モラル・アイデンティティの研究は、モラル・アイデンティティの特性的な個人差の観点に焦点を当てる「人格特性的な視点」と、道徳的なスキーマへのアクセシビリティなどに焦点を当てる「認知・情報処理的な視点」が主流であり、その他にその人の自分語り、人生の物語に焦点を当てる「ナラティブな視点」からの研究もあることが明らかにされた。

これらの視点の違いや、研究目的の違いに合わせて様々な測定法が研究されており、実証的研究に活用されていることも明らかにされた。

(2) インタビューや自由記述文の分析方法

の開発については、以下のような成果が得られた。

VEiN の日本語翻訳版を用いて日本の大学生の自由記述をコーディングし、その頻度を分析したところ、上位には「自己決定」「安全」「達成」「パワー」「快樂」などが並んだ。北米の対象者に行ったオリジナルの研究である Frimer, Walker & Dunlop(2009)の結果と比較すると、ほとんどの道徳的価値で似たようなランキングとなったが、「刺激」については、Frimer, Walker & Dunlop(2009)では5位であったのに対して、日本の学生の場合は9位であり、日本の学生が「刺激」という価値をあまり重視していない可能性が示された。

表1 日本人大学生の回答に含まれる価値

順位	価値	頻度(%)
1	自己決定	17.5
1	安全	17.5
3	達成	13.3
4	パワー	9.8
5	快樂	7.8
6	伝統	6.1
7	協調	5.2
8	思いやり	3.2
9	刺激	3.1
10	博愛	0.7

今年度の目標として書かれた自由記述の文を分析し、どのようなキーワードが多く含まれるかを検討した。中学校全体の傾向としては、「人」「自分」「勉強」「行動」「友達」が多く含まれていた。学年ごとにみると、中学1年生では「友達」が4位、「部活」が5位にあることが特徴であった。中学2年生では「行動」が3位、「責任」が4位にあることが特徴であった。中学3年生では5位に「クラス」があることが特徴であった。経験や成熟により、大切にしたい価値が変化していることが推測される。

表2 中学生の年間目標に多く含まれていたキーワード(学年別)

1年生(N=171)		
順位	キーワード	頻度(%)
1	人	28.7
2	勉強	27.5
3	自分	24.0
4	友達	22.8
5	部活	15.2
6	行動	14.6
7	あいさつ	11.1
8	生活	11.1
9	両立	11.1

10	学校	10.5
2年生(N=167)		
順位	キーワード	頻度(%)
1	人	31.1
2	自分	24.6
3	行動	13.8
4	責任	13.2
5	勉強	12.0
6	部活	11.4
7	生活	10.8
8	思いやり	10.2
9	心	10.2
10	クラス	9.0
3年生(N=147)		
順位	キーワード	頻度(%)
1	自分	32.7
2	勉強	23.1
3	人	23.1
4	行動	18.4
5	クラス	12.9
6	生活	10.9
7	責任	9.5
8	気持ち	8.8
9	感謝	8.8
10	礼儀	8.2

(3) 新たに作成したモラル・アイデンティティの尺度 14 項目について因子分析を行った結果、1 因子構造で解釈することが適切であると思われた。係数などを参考に検討したところ、2 項目を削除した 12 項目から成る尺度の信頼性が高いと思われる。

(4) 研究対象とした学校においては、年度の中で道徳的価値を大切に思う程度も、自分がその価値を実現できていると思う程度も徐々に上昇する傾向にあったが、学年によってその変化には違いがあった。運動会は、全ての学年の生徒に対して、道徳的価値の重要性も、道徳的価値の実現度の認識も高める影響力を持っていたが、合唱コンクールについては中学3年生では得点の上昇が見られたが、中学1年生、2年生ではそのような傾向はなく、逆に得点が減少する傾向も見られている。経験や成熟によって、学校行事による経験が道徳性の発達に与える影響が異なることが示唆される。図の1と2は、「自他の尊重」

の項目についての変化を示した。

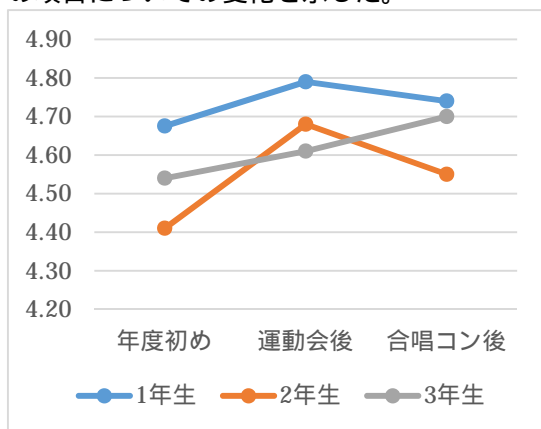


図1 「自他の尊重」重要度（大切か）の変化

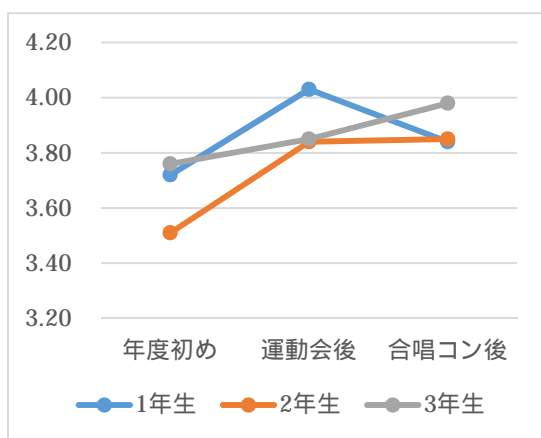


図2 「自他の尊重」自己評価（できたか）の変化

(5) 次期学習指導要領では、「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」が重要視されており、それを実現する上で道徳教育、「特別の教科 道徳」に期待されることは大きい。ここでいう「人間性」とは、広い意味での「道徳性」にほぼ等しいとも言え、日本だけではなく、世界的にも次世代型教育において人間性・道徳性の育成は極めて重要なものと考えられている。モラル・アイデンティティは、道徳的であることと自分らしくあることが、統合・調和・融合したものである。日本の子どもや若者の道徳性や道徳教育をモラル・アイデンティティの観点から理解し、実践を考案することは、大変意義のある可能性があると思われる。

<引用文献>

Colby, A. & Damon, W. Some do care: Contemporary lives of moral commitment. 1992 New York, NY: Free Press

Frimer, J. A. & Walker, L. J. Reconciling the Self and Morality: An Empirical Model of Moral Centrality Development. Developmental Psychology Vol. 45, No. 6,

2009, 1669-1681

Frimer, J. A., Walker, L. J. & Dunlop, W. L. Values Embedded in Narrative (VEiN) 2009 Coding Manual Unpublished Manual

Hardy, A. S. & Carlo, G. Moral identity: What is it, How does it develop, and is it linked to moral action? Child Development Perspectives. Vol.5, 2011, 212-218

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

松尾直博、道徳性と道徳教育に関する心理学的研究の展望 - 新しい時代の道徳教育に向けて -、教育心理学年報、55巻、2016、165-182

<http://doi.org/10.5926/arepj.55.165>

[学会発表](計 3件)

Naohiro MATSUO Development of Moral Values during Junior High School. 42nd Association for Moral Education, 2016年12月10日、Massachusetts、U.S.A.

Naohiro MATSUO Goals for the new school year of Japanese Junior High school students. 31st International Congress of Psyschoogy, 2016年7月29日、パシフィコ横浜、神奈川県横浜市

Naohiro MATSUO Characteristics of Values in Japanese university students. 41st Association for Moral Education, 2015年11月6日、Santos, Brazil

6. 研究組織

(1)研究代表者

松尾直博 (MATSUO, Naohiro)
東京学芸大学 教育学部 准教授
研究者番号：10302902